

# CBRC

# NEWSLETTER

No.  
4

SUMMER 2003

## バイオインフォマティクスの ホワイトホール

副研究センター長・総括研究員・生体膜情報チーム長  
(併任) 奈良先端科学技術大学院大学 連携講座 客員教授  
諏訪 牧子

私自身はこれまでに"学"(東京農工大学)、“産”(株式会社ヘリックス研究所)、“官”(工業技術院、産業技術総合研究所)と一通り歩んでいますが、それぞれ研究スタンスや時間の流れ方が異なっていることを体験してきました。どちらかと言えば、“産”は、解決法を選択し1~2年の期間で商品化につながる研究をする所。“官”は、解決法選択のトレンドを作りながら大型プロジェクトを推進する所。“学”は、何年かけても解決法がわからない問題について敢えて挑戦する所。あくまで“こうなるべき”ということではなく、“この方が向いている”という程度の見方です。

私たちが産学官連携を行う場合、共同研究、人材交流、情報交換、知財提供等の枠組みで、上記のように多様な研究スタンスの相手と付き合うこととなります。加えて、CBRCでは、医学、製薬企業等の実験をする方たちとの付き合いが多く、結果として極めて多様な価値観がぶつかる空間が出現します。この中では、

自分はいったいどのスタンスの研究をやっているのか、良くわからなくなる瞬間があります。バイオインフォマティクスから生み出される学問的成果が、特に産業につながり易いことも、このような感覚を生み出す一因でしょう。



研究スタンスを明確にした方が、成果が出やすいという意見があると思います。しかしどんなスタンスの研究であっても、本人たちにとっては、面白いからやっていることには変わり無く、この分類は、甚だ迷惑なのかもしれません。面白い!! という研究意欲を高く保ちつつ、多くの価値観をひたすら吸収していくうちに、ある日突然、ホワイトホールのように

バイオインフォマティクスの新しい価値観や、新しい研究領域が爆発的に生み出され、結果的には産業的にも、学術的にも、国策的にも貢献していたというようになれば最高でしょう。

ちなみに私は現在、産学官連携の一環として、奈良先端科学技術大学院大学の情報科学研究科と連携を組んでおり、生体膜情報学講座として学生を抱えています。彼らは、奈良で授業の単位を取得後、CBRCに来て研究しています。研究対象は、G-蛋白質共役型受容体を始めとする生体膜に関連するタンパク質で、配列情報から機能予測を試みたり、比較ゲノム解析により遺伝子や選択的スプライス産物やSNPなどを俯瞰的に解析したりしています。彼らの発想は、未熟な点も多いのですが、時として、多くの熟練した研究者では、思いもつかないようなユニークなものを出してきます。興味の赴くままの若い発想を大切にしつつ、ホワイトホールの一角を担おうと思っています。